

時間次元における諸自己像の関連から見た時間的展望

立教大学 杉山成¹

A study of time perspective in relation to time-referent self-images

Shigeru Sugiyama (Department of Psychology, Faculty of Letters, Rikkyo University, Toshima-ku, Tokyo 171)

The purpose of the present study was to examine the relationship between time perspective and self-images of the present and future. A questionnaire was administered to 240 university students; it consisted of Self-Differential Scale (Nagashima, Fujiwara, Harano, Saito, & Hori, 1967) for three images of present, ideal, and predicted self; Identity Confusion Questionnaire (Sunada, 1979); and items about attitude toward personal past, present, and future. The main findings were as follows: (1) The discrepancy between images of present and ideal self was correlated significantly with attitude toward personal present. (2) The discrepancy between images of predicted and ideal self was correlated significantly with attitude toward personal future. (3) In the high identity-confusion high group, the discrepancy between images of present and ideal self was correlated significantly with attitude toward personal present. But in the low group, the correlation was not significant.

Key words: present self, predicted self, ideal self, time perspective, time attitude.

個人の時間的展望 (time perspective) の研究対象には、extension (概念化された将来の時間的範囲の長さ) をはじめとして種々の変数が考えられるが、Nuttin & Lens (1985) は、そうした時間的展望の変数を、extension や density といった狭義の時間的展望、時間的態度 (time attitude)、時間的志向性 (time orientation) という三つの側面によってとらえている。このうち、時間的態度は、個人の過去・現在・未来に対する評価ないし感情を意味し、年齢、社会階層、抑うつ、自殺企図などとの関連が検討されてきた。

近年、これに加えて、‘自己’との関連性を扱う研究が次第に増加している。そうした研究の一つに、自我同一性と時間的態度の関連性を検討するものがある。例えば都筑 (1993) は、大学生 285 人に対する調査を行い、過去・現在・未来に対するイメージと自我同一性地位との関連を検討した。その結果、同一性拡散地位に分類された個人は、他の地位の個人に比して、過去・現在・未来に対するネガティブなイメージをもっていた。

また、自己像との関連を検討した研究には、自己ラベリングを検討した Tohyama & Nakajima (1989)

や、セルフ・ディファレンシャル尺度 (長島・藤原・原野・斉藤・堀, 1966, 1967) を自己像の指標とした根本・中沢 (1990) がある。Tohyama & Nakajima (1989) は、20歳から26歳までの165人の男性鑑別所収容者に対して、質問紙を用いて自己ラベリング得点と時間的展望得点の関連性を検討し、両者の間にネガティブな関連を見出した。そして、収容者が自身をネガティブに考えることが彼の未来の時間的展望を乏しいものとしていると考察している。また、根本・中沢 (1990) は、時間次元に対する不安を意味する時間不安 (time anxiety) を検討し、自己像における強靱性、過敏性因子と時間不安との間に関連があることを確認している。

これらの研究からは、自分が何をしてきたか、何ができるか、何を成し遂げることができるのかといった自己に関する考え、すなわち自己概念が個人の時間的態度の形成の過程において中心のなかかわりをもっていることが示唆される。今までの研究において行われてきた自己評価との関連 (百合草, 1981)、自己効力感との関連 (林・瀧本, 1992)、有能感との関連 (南・光富, 1990) という問題も自己概念と時間的展望とのなかかわりとしてとらえ直すこともできるであろう。

但し、上のような自己と時間的態度の関連性に関する研究は、現状における自己認知を適応の指標や個人

¹ 本論文の作成にあたり御指導頂いた立教大学一般教育部水口禮治教授に深く感謝致します。

の発達の指標としたものであり、研究の対象は現在の自己の特性に限られている。しかし、個人の自己概念には、現在の自己だけではなく、過去や未来における自己像といった時間次元における諸自己像も含まれており、個人は日常的にそうした時間次元における自己像を比較していると考えられる。Albert (1977) は、個人が自己の連続性の確認のために、現在の自分の能力や考えを過去や未来の自分と比較することを指摘し、他者を比較対象とする社会的比較 (social comparison) に対して、この過程を継時的比較 (temporal comparison) と呼んでいる。

そこで本研究では、時間的態度の規定要因としての自己概念を、現在の特性のみではなく、現在と未来の自己の相互関連のなかでとらえることを目的とし、具体的には、時間次元における諸自己像の不一致の大きさと時間的態度との関連性の検討を行う。

時間次元における自己像に関しては、杉山 (1994) が、現在経験中の‘現在自己’に対して、未来の自己像では‘なりたい’という願望としての‘理想自己’と、‘こうなっているであろう’という‘予想自己’を区別してとらえている。理想自己は‘未来における自己の理想水準’、一方の予想自己は現在自己の延長として‘未来における自己の現実水準’に対応する。そうした観点から、本研究では自己像間の不一致を扱った諸研究で得られた知見に基づき、現在と理想、予想と理想の自己像間の不一致と時間的態度との関連性について以下の仮説を設定した。

従来、私的な理想の自己像と私的な現実の自己像のずれは、その個人の現在の適応の指標となることが論ぜられており、一般的には、その差異の大きいほど不適応の傾向を示すと言われている (松田・広瀬, 1982)。そうした見解からは、個人的現在への態度について、それが現在の自己と理想の自己の不一致と関連をもつことが推測される (仮説1)。

一方、個人的未来に対する態度に関しては、理想自己と同じ未来の時間次元に予想の自己像が存在しているため、理想自己と比較させられるのは現在の自己ではなく時制の等しい予想自己となり、それらの関係が個人的未来における‘理想と現実’を意味することになる。従って、予想自己と理想自己の間の不一致の大きさが、両自己像の位置する個人的未来への態度と関連をもつであろうと考えられる (仮説2)。

また、杉山 (1994) では、自我同一性レベルの高い個人の予想自己が、低群のそれに比して、現在の自己や過去の自己に大きく規定されているなど、自己像間の関連性が自我同一性レベルによって異なることが示されている。このことから、自我同一性レベルの高・低群において時間次元の諸自己像の構造化の程度に差異があることが推測されるため、仮説1および仮説2で述べられた自己像間の不一致と時間的態度

との関連の様相は、自我同一性レベルの高群と低群で異なることが推測される。この点を探索的に検討するために、本研究では自我同一性レベルの高群と低群それぞれにおいて自己像間の不一致と時間的態度の関連性を比較検討する。

方 法

被験者・調査手続き

被験者は18歳から23歳の大学生240名 (男性114名、女性126名) である。心理学の授業中に質問紙を配布し、回答させた。

質問紙の構成

諸自己像の測定 長島他 (1966, 1967) のセルフ・ディファレンシャル尺度によって測定した。形容詞は、向性 (外向的な-内向的な、おしゃべりな-無口な)、情緒安定性 (丸い-角のある、暖かい-冷たい)、強靱性 (臆病な-勇敢な、弱々しい-たくましい)、誠実性 (誠実な-不誠実な、まじめな-ふまじめな)、過敏性 (敏感な-鈍感な、安定な-不安定な)、理知性 (理性的な-感情的な、冷静な-情熱的な) であり、長島他 (1966, 1967) の大学生で得られた六つの因子のそれぞれから、因子負荷量の大きいものをとった12対である。提示の際には後背効果を考慮して形容詞の順序と方向をランダムにして7件法で測定した。

手順は以下ようになる。まず‘現在の自己’‘理想の自己’というコンセプトについて評定させ、それらの存在時期の年齢についての判断をさせる。このように現在と理想の自己像の存在時期を明確にさせた上で、“さて、ここまで‘理想の自己’について答えてもらいました。それでは、その‘理想の自己’の時期に、あなたは実際にはどういう人間になっていると思いますか。その‘予想の自己’についてお答え下さい”という教示を与え、予想の自己像についての評定をさせた。

時間的態度の測定 時間次元における諸自己像が自己の現状認知や理想、予想を対象としているのに対し、時間的態度は、個人的過去・個人的現在・個人的未来という各時間次元を対象とした一般的態度であり、特に、青年の個人的未来に対する態度に関しては、重要で個人的に関連した未来の目標群の誘意性の総和を反映すると考えることもできる (Van Calster, Lens, & Nuttin, 1987)。

この時間的態度の測定に関しては、SD法の形式を使用し、‘あなたの過去’、‘あなたの現在’、‘あなたの未来’について評定するように求めた。形容詞対は小宮山 (1989) が、時間的次元に関する評価的因子としたものから代表的な3項目 (明るい-暗い、美しい-醜い、よい-悪い) を選択し、7段階で回答を求めた。

形容詞の順序と方向は、後背効果を考慮し、それぞれの評定の際にランダムに提示した。

自我同一性レベルの測定 砂田 (1979) の同一性混乱尺度を用いた。これは 34 項目よりなる 1 次元性の尺度である。回答は 3 件法で、同一性混乱の方向を示している選択肢の反応を 2 点、'どちらでもない' を 1 点、逆方向を 0 点として点数化を行った。

結果

まず、諸自己像の存在する年齢を対比し、現在自己と理想自己・予想自己の時間軸上の位置付けを各ケースごとに調べた結果、理想自己・予想自己の年齢が現在自己の年齢以下というケースが男性において 3 件、女性に 1 件あった。彼らにおいては、理想自己と予想自己が未来の自己を意味しないと考えられたので、以下の分析から除いた。そのため、最終的に 236 名が分析の対象になった。

現在・理想・予想における自己概念のセルフ・ディファレンシャル尺度は 2 項目ずつの 6 因子で構成されているので、その 2 項目ずつの相関係数を算出したところ、どの自己像においても過敏性の因子においてのみ項目間の相関が 1% 水準で有意に至らず、他の因子に比して低いものであった。そこで、以下では過敏性の因子に当たる項目を削除して分析を進めた。そして、三つの自己像それぞれに因子分析を行った結果、長島他 (1966, 1967) の尺度構成時の研究と全く同じ因子が抽出され、これらの因子的構造が共通していることが確認された。

自己像間の不一致度に関しては、砂田 (1979) や松田・広瀬 (1982) と同様に、セルフ・ディファレンシャル尺度を応用した諸自己像間の不一致度 (因子ごとの得点の差の 2 乗を合計したものの平方根 $Dis = \sqrt{d^2}$: 以下 Dis スコアと略称) を不一致度の測度とした。そして、現在・理想・予想の各自己像から、現在-予想、現在-理想、予想-理想の三つの Dis スコアを算出した。それぞれの Dis スコアの平均は、現在-予想は、4.25 (標準偏差, 2.47)、現在-理想は、6.52 (標準偏差, 2.96)、予想-理想は、4.87 (標準偏差, 2.55) であった。

時間的態度の測度に関しては、主成分分析を行った結果、1 因子性が強いと考えられたので、この 3 項目の単純合計を態度得点とした。得点が高いほど、ポジティブな態度を示す。なお、Cronbach の α 係数は個人的過去への態度で 0.80、個人的未来への態度で 0.83 であった。時間的態度得点は 3 点から 21 点までの値をとり得るが、個人的過去への態度の平均は 11.7 (標準偏差, 3.44) 個人的現在への態度の平均は 12.3 (標準偏差, 3.26)、個人的未来への態度の平均は 14.2 (標準偏差, 3.08) であった。

同一性混乱尺度については、各項目得点と当該の項

Table 1
Dis スコアと時間的態度の偏相関

	過去への 態度	現在への 態度	未来への 態度
全体 (n=236)			
現在-理想	-.13*	-.26**	.09
現在-予想	-.07	.01	.13*
予想-理想	-.05	.01	-.36**
自我同一性レベル高群 (n=79)			
現在-理想	-.01	-.05	.26**
現在-予想	-.15	.13	.10
予想-理想	-.18	-.07	-.40**
自我同一性レベル低群 (n=79)			
現在-理想	-.25**	-.43**	-.01
現在-予想	-.03	.13	.12
予想-理想	.09	.09	-.31**

* $p < .05$, ** $p < .01$

目を除く合計得点との相関を算出し、1% 水準で有意な相関をもっていた 33 項目の合計得点を同一性混乱の指標として採用した。全体の α 係数は 0.75 となり、一応の内的一貫性が認められる。得点分布は正規分布に近かったので、上位・下位約 30% ずつで被験者を分割し、低得点 30% の被験者群を自我同一性レベル高群 (79 名)、高得点 30% の被験者群を自我同一性レベル低群 (79 名) とした。

自己像間の不一致と時間的態度の関連 三つの Dis スコア間には、0.22 から 0.35 までの相関が認められたので、他の二つの Dis スコアを統制して各 Dis スコアと時間的態度の間の偏相関係数を算出した (Table 1)。

まず、個人的過去と個人的現在への態度と有意な関連のあったのは現在-理想の Dis スコアであり、不一致が大きいかほど態度がネガティブになるという、負の関係にあった (個人的過去への態度では、 $r = -.13$, $p < .05$ 個人的現在への態度では、 $r = -.26$, $p < .01$)。

一方、個人的未来への態度と有意な相関のあったのは現在-予想、および予想-理想の Dis スコアであり、現在-予想の Dis スコアとは正の関係 ($r = .13$, $p < .05$)、理想-予想の Dis スコアとは負の関係 ($r = -.36$, $p < .01$) を示した。

自我同一性レベル高・低群の比較 自我同一性レベルの高・低群間における自己像の不一致と時間的態度との関連性を比較するために、それぞれの群において Dis スコアと時間的態度との間の偏相関係数を算出した。

個人的過去に対する態度については、自我同一性レベル低群では全体と同様に現在-理想の Dis スコア

との間に有意な負の相関が見られた ($r = -.25, p < .01$) が、高群においては有意な相関関係は認められなかった ($r = -.01$ ns)。

次に、個人的現在に対する態度では、自我同一性レベル低群においては、全体と同様に現在-理想の Dis スコアとの間に有意な負の相関 ($r = -.43, p < .01$) が認められたが、高群においては、有意に至らなかった ($r = -.05$ ns)。

一方、個人的未来への態度に関しては、自我同一性レベルの両群において、予想-理想の Dis スコアとの有意な関連が確認された (自我同一性レベル高群では、 $r = -.40, p < .01$ 、低群では、 $r = -.31, p < .01$)。両群における偏相関係数の差の検定を行った結果、それらの差は有意には至らなかった。その他、自我同一性レベル高群のみにおいて現在-理想の Dis スコアとの関連が有意 ($r = .26, p < .01$) であった。また、全体のデータの分析で個人的未来との関連が有意であった現在-予想の Dis スコアの偏相関係数は、どちらの群においても有意ではなかった (自我同一性レベル高群では、 $r = .10$ ns、低群では、 $r = -.12$ ns)。

考 察

本研究では、時間次元における自己像間の不一致と時間的態度との関連性を検討するために、現在-予想、現在-理想、予想-理想という自己像間の Dis スコアと個人的過去・個人的現在・個人的未来に対する態度との間の偏相関を求めた。

自己像間の不一致と時間的態度の関連 自己像間の不一致と時間的態度に関して設定した仮説は、個人的現在への態度と現在-理想自己間の不一致との関連 (仮説 1)、および個人的未来への態度と予想-理想自己間の不一致との関連 (仮説 2) であった。

そして、全体のデータにおける結果として、個人的現在への態度と現在-理想の Dis スコアとの間に有意な負の関連性が、一方、個人的未来への態度に関しては予想-理想の Dis スコアとの間に有意な負の関連性が確認された。これらの結果は仮説 1、仮説 2 を支持するものと言える。

更に、仮説には含めなかったが、現在-予想の Dis スコアと個人的未来への態度との間に有意な関連が認められた。これは上の仮説における自己間の不一致と時間的態度との関連とは逆方向の正の関連であり、不一致が大きいほど未来への態度がポジティブになる傾向を示していた。

このように、本研究においては、予想自己と理想自己、および予想自己と現在自己との不一致が個人的未来への態度と関連をもつ傾向が確認されたが、この背景には個人が未来の自己に対して抱く「期待」の上昇や維持という効果が推測される。

未来への展望と期待との関連を検討したいくつかの研究からは、未来の理想水準との隔たりや目標達成への期待と、未来へのポジティブな展望や未来への働きかけとの強い関連性が示唆されている。例えば、Lewin (1948) は、個人が進んで払おうとする努力や苦痛はそれによって目標に到達し得るという望みによって支えられていると指摘した。また、個人的目標の特性の認知と時間的態度の関連を検討した表谷 (1994) は、目標達成に関する外的統制性、すなわち、目標の達成を自己の内的な要因に期待できないという認知と、個人的未来へのネガティブな態度との関連性を見出している。

本研究で見られた予想自己と理想自己の不一致と個人的未来への態度の関連性からは、現在の自分と理想の自分の間に隔たりがあり、それ故に現在の時間次元に対する態度がネガティブなものであったとしても、未来においてその隔たりを埋めることができるという期待をもつことにより、未来という時間次元への態度はポジティブなものになることが示される。また、現在自己と予想自己の不一致と個人的未来への態度との関連性からは、現在よりも望ましい自己を予想できること、すなわち自己の成長に対して期待することが個人的未来への態度と正の関連をもつことが示唆される。このように、現在と未来の自己像間の不一致を通して、個人的未来への態度にポジティブな直接的影響を及ぼしているのは、未来の自己に対する期待なのであろう。

自我同一性レベル高・低群の比較 自我同一性レベルの高群と低群においては、自己像間の不一致と時間的態度との関連性において、両群が異なる傾向を示すことが推測された。

結果として、個人的未来に対する態度と予想-理想の Dis スコアとの関連性の強さに関しては両群間でその差は有意ではなかったが、個人的現在に対する態度に関しては、自我同一性レベル低群では現在-理想の Dis スコアとの間に有意な関連が見られたのに対し、高群では有意ではなかった。このような違いからは、生活空間における現在自己や理想自己のリファレンスとしての位置付けが、自我同一性レベルと関連をもつことが示唆される。

ところで、全体のデータの分析で得られた現在-予想の Dis スコアと個人的未来への態度との関連は、理想-予想の Dis スコアとの関連に比してそれほど大きいものではなく、自我同一性レベルの両群を分割した分析では有意に至らなかった。上述のように、現在自己と予想自己の不一致は自己の成長への期待を反映し、一方の予想自己と理想自己の不一致は、未来においてそれだけ目標に近づくことができるかという期待を反映している。それ故、この結果からは、個人的未来への態度のリファレンスとしての予想自己は、現在

と比較した予想自己のポジティブさとしてよりも、理想自己との相対的な関連性のなかにおいて、より強く機能することが推測される。

結果の要約 以上のように、本研究では時間的展望の一側面である時間的態度と、時間次元における諸自己像との関連性についての検討を行い、その結果、理想自己と現在自己の不一致と個人的現在への態度との関連性、また、理想自己と予想自己、現在自己と予想自己の不一致と個人的未来への態度との関連性が示された。

但し、Nuttin & Lens (1985) や都筑 (1993) は時間的展望の、より内容的な側面の検討の必要性を指摘しており、今後はこうした方向 (例えば目標の内容や、未来に対する行動計画の内容) に展開していく必要があるであろう。また、時間次元における自己像間のさまざまな側面における不一致と時間的展望との対応を検討していくことも必要である。こうした検討によって時間的展望の形成における自己概念の役割が、より明確になると期待される。

引用文献

- Albert, S. 1977 Temporal comparison theory. *Psychological Review*, **84**, 485-503.
- 林 潔・瀧本孝雄 1992 問題解決行動と self-efficacy, および時間的展望との関連について 白梅学園短期大学紀要, **28**, 51-57.
- 表谷真知子 1994 青年の時間的展望と個人的目標についての調査 1993 年度立教大学心理学科卒業論文 (未公刊).
- 小宮山要 1989 青年の時間的展望に関する研究 I ——未来の時間的展望の明暗と時間次元に対する態度の比較—— 桜美林短期大学「紀要」, **25**, 105-126.
- Lewin, K. 1948 *Resolving social conflicts*. New York: Harper.
- 松田君彦・広瀬春次 1982 青年期における自己像と自我同一性 教育心理学研究, **30**, 67-161.
- 南 博文・光富 隆 1990 青年期における未来展望と有能感の関係に関する研究 広島大学教育学部紀要, **38**, 241-247.
- 長島貞夫・藤原嘉悦・原野広太郎・斉藤耕二・堀 洋道 1966 自我と適応の関係についての研究 (1) ——セルフ・ディファレンシャル作成の試み—— 東京教育大学教育学部紀要, **12**, 85-106.
- 長島貞夫・藤原嘉悦・原野広太郎・斉藤耕二・堀 洋道 1967 自我と適応の関係についての研究 (2) ——セルフ・ディファレンシャルの作成の試み—— 東京教育大学教育学部紀要, **13**, 59-67.
- 根本橋夫・中沢千鶴加 1990 時間不安と自我同一性、達成動機、および自己像との関係 千葉大学教育学部研究紀要, **38**, 47-54.
- Nuttin, J., & Lens, W. 1985 *Future time perspective and motivation: Theory and research method*. Leuven: Leuven University Press/LEA.
- 杉山 成 1994 時間次元における諸自己像の関連性と自我同一性レベル 教育心理学研究, **42**, 209-215.
- 砂田良一 1979 自己像との関係からみた自我同一性 教育心理学研究, **27**, 215-220.
- Tohyama, N., & Nakajima, F. 1989 Self-labeling and time perspective in young inmates. *Tohoku Psychologica Folia*, **48**, 33-41.
- 都筑 学 1993 大学生における自我同一性と時間的展望 教育心理学研究, **41**, 40-48.
- 百合草禎二 1981 現代青年の自己評価と時間的展望について 日本教育心理学会第 23 回総会発表論文集, 504-505.
- Van Calster, K., Lens, W., & Nuttin, J. 1987 Affective attitude toward the personal future: Impact on motivation in high school boys. *American Journal of Psychology*, **100**, 1-13.

——1994. 5. 2 受稿, 1995. 3. 4 受理——